

第10回 大阪大学 専門日本語教育研究協議会

—内容言語統合型学習（CLIL）の実践に向けて—



大阪大学 国際教育交流センター
2017 年（平成29年） 2 月 21 日（火）

第 10 回大阪大学専門日本語教育研究協議会

目 次

プログラム	1
背景および趣旨	2
講演 1 : CLIL (内容言語統合型学習) の理論・事例・発展	
上智大学文学部英文学科 教授 大学院言語科学研究科英語教授法コース兼任 池田 真	3
講演 2 : 名古屋大学日本法教育研究センターと CLIL	
名古屋大学大学院法学研究科 特任講師 (法政国際教育協力研究センター勤務) 宮島 良子	11
報 告 : 大阪大学における CLIL の実践に向けて	
大阪大学国際教育交流センター 日本語教育研究チーム 教授 西口 光一	17
全体討論	20
写真 : 協議会風景	23
付録 : 過去の大阪大学専門日本語教育研究協議会の開催状況	26

第10回大阪大学専門日本語教育研究協議会

日 時：2017年2月21日（火）13:00～17:00（受付 12:40～）
場 所：大阪大学吹田キャンパス ICホール 2階 講義室5 & 6
主 催：大阪大学国際教育交流センター

第10回大阪大学専門日本語教育研究協議会

— 内容言語統合型学習（CLIL）の実践に向けて —

総合司会 国際教育交流センター 特任准教授 金 孝卿

13:00～13:10 開会の挨拶 国際教育交流センター センター長 有川 友子

13:10～14:00 講演1：CLIL（内容言語統合型学習）の理論・事例・発展

池田 真

上智大学文学部英文学科 教授

大学院言語科学研究科英語教授法コース兼任

14:00～14:10 休 憩

14:10～15:00 講演2：名古屋大学日本法教育研究センターと CLIL

宮島 良子

名古屋大学大学院法学研究科 特任講師

（法政国際教育協力研究センター勤務）

15:00～15:15 休 憩

15:15～16:00 報 告：大阪大学における CLIL の実践に向けて

西口 光一

大阪大学国際教育交流センター 教授

16:00～16:10 休 憩

16:10～16:55 討 論：大学での日本語教育における CLIL の可能性を考える

司会 国際教育交流センター 准教授 西村 謙一

16:55～17:00 閉会の挨拶 国際教育交流センター 副センター長 村岡 貴子



Twitter から参加しよう！

Twitter にて情報を発信しています。

ハッシュタグ（#oujsp10）をつけて、ご意見・感想・質問をどんどん tweet してください！

第10回大阪大学専門日本語教育研究協議会

— 内容言語統合型学習（CLIL）の実践に向けて —

主催 大阪大学国際教育交流センター

背景および趣旨

短期留学生がますます増加し、英語学位プログラムへの学生受入れを始めた日本の大学は、現在、新たな日本語教育の課題に直面していると言ってもいいでしょう。これまでも、日本語教育を受ける学生には漢字系と非漢字系との違いや一般的な既習日本語力の違いなどがありました。現在は、くだけた口頭日本語コミュニケーションは十分にできるがややフォーマルなゼミでの話し方ができない学生や、話す能力はひじょうに高いが読み書きがまったくできない海外から帰国してきた日本人学生や日本で生まれ育った外国籍者など、これまでには見られなかった学習者の質的な多様性が出てきています。一方で、昨年の本研究協議会でのテーマになっていたように、学生たちの情報通信メディアを使つての情報収集やその加工の能力や情報コミュニケーションの能力はますます向上しています。

従来よりカリキュラム・教材開発を推進し新たな教育実践の創造を積極的に進めてきた大阪大学国際教育交流センターでは、こうした多様な学生に大学としてふさわしい日本語習得の機会を有効に提供するために、内容と言語を統合した教育であるCLIL（content and language integrated learning）の方法を応用した上級以降の日本語教育の企画と実践の展開について検討しています。そのような方向での教育展開の可能性を探るために、本年度の専門日本語教育研究協議会ではCLILをテーマとして採り上げることとしました。

まずはじめに、CLILの理論や原理を改めて検討し教育方法等を知るために、CLILを先端的に実施している上智大学の池田真先生にCLIL概論のようなご講演をいただきます。次に、日本語教育においてCLILを先行して開発し実践している名古屋大学の宮島良子先生に、同大学の法政国際教育協力研究センターのプログラムデザインやカリキュラムや教育実践の状況などについてお話しいたします。他に、大阪大学国際教育交流センターの西口光一は、大阪大学でのCLILへの関心の背景や上級日本語クラスを取り巻く状況などについて報告をします。

これまでの言語だけにフォーカスをした上級日本語教育に対しCLILはどのようなポテンシャルがあるのか、短期留学生や英語プログラム学生を対象としたクラスでCLILはどのような効果が期待できるのか。このようなテーマは、本学に限らず、日本語を学習する学生の新たな多様性に直面している多くの大学教員の関心であろうかと思われます。今回の協議会が新たな教育実践の可能性を拓く契機となることを期待しています。

講演 1

CLIL(内容言語統合型学習)の
理論・事例・発展

池田 真

上智大学文学部英文学科 教授、
大学院言語科学研究科英語教授法コース兼任


上智大学
 SOPHIA UNIVERSITY
 叡智が世界をつなぐ

**CLIL (内容言語統合型学習) の
理論・事例・発展**

上智大学 池田真 makoto-i@sophia.ac.jp

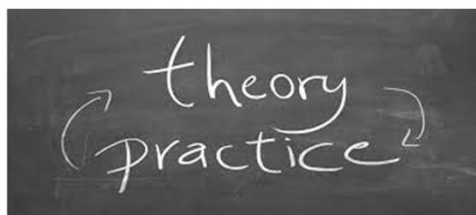
2017年2月21日

 第10回大阪大学専門日本語教育研究協議会
 「内容言語統合型学習 (CLIL) の実践に向けて」

講演内容

- 1 CLILの理論: 原理と技法
- 2 CLILの事例: 教材と授業
- 3 CLILの発展: 汎用力育成

1 CLILの理論: 原理と技法



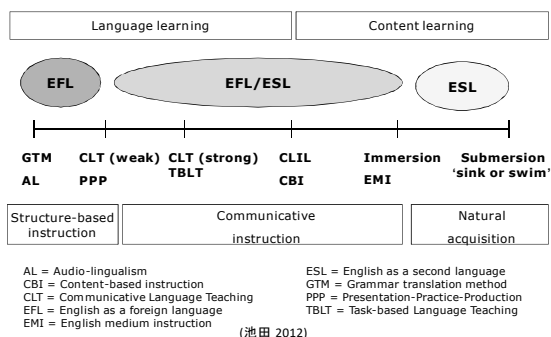
CLILの定義

Content and Language Integrated Learning (CLIL) is a dual-focused educational approach in which additional language is used for the learning and teaching of both content and language.

CLILは2焦点の教育法であり、母語以外の言語を使って内容と言語の両方を学び教えるものである。

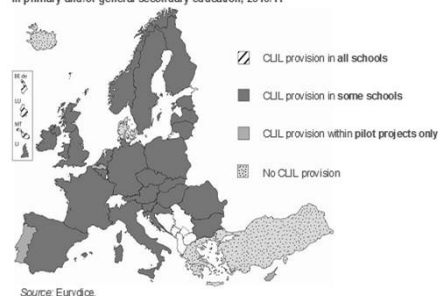
(Doyle, Hood & Marsh 2010: 1)

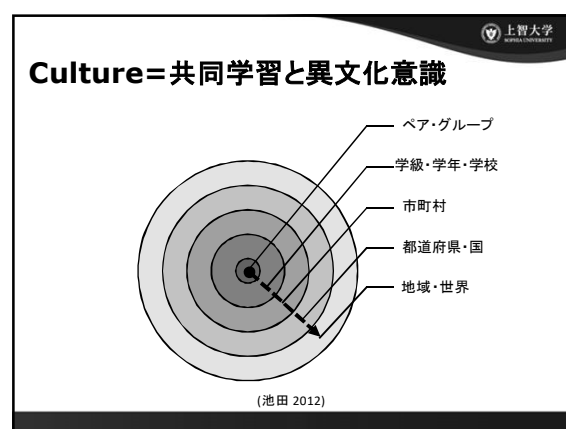
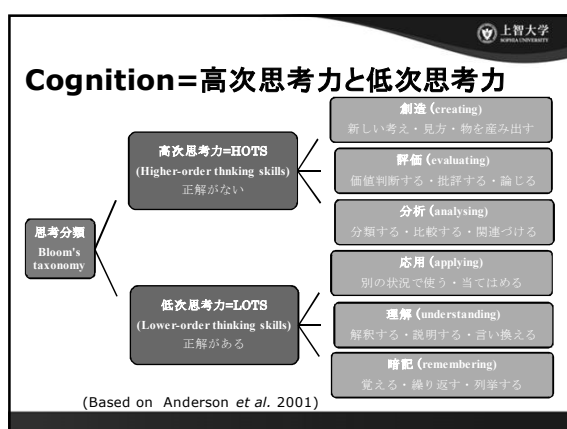
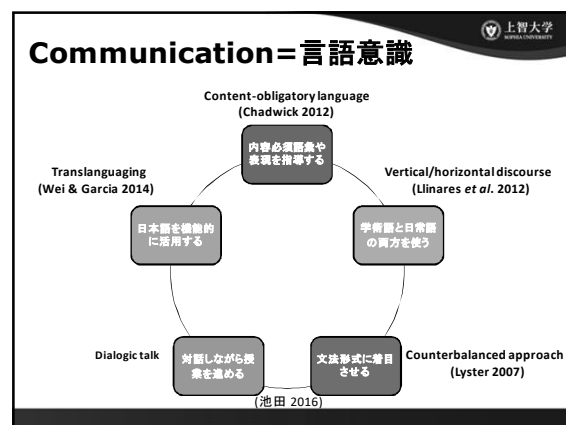
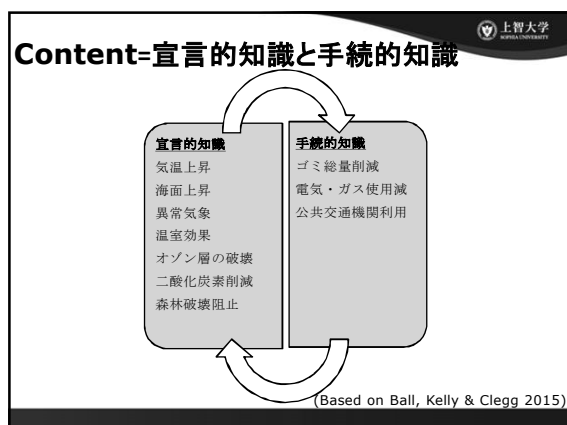
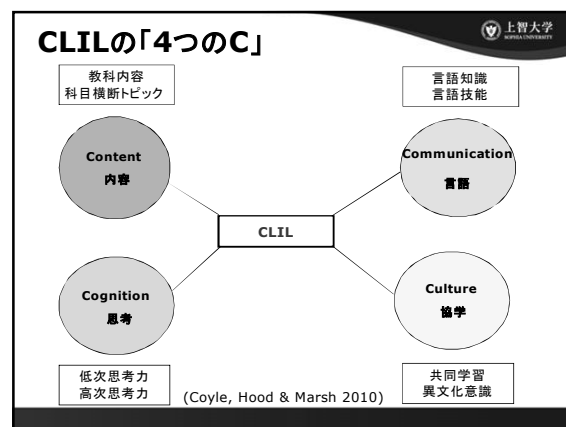
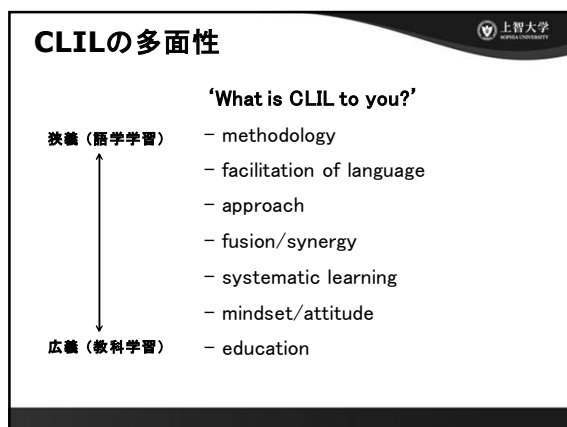
理論上の位置づけ



ヨーロッパでの普及

Figure B9: Existence of CLIL provision in primary and/or general secondary education, 2010/11





上智大学
SAPPHIRE UNIVERSITY

CLIL授業設計シート

Content 内容	Communication 言語	Cognition 思考	Culture 協学
Declarative knowledge 教科知識	Language knowledge 言語知識	LOTS 低次思考力	Cooperative learning 共同学習
Procedural knowledge 活用知識	Language skills 言語技能	HOTS 高次思考力	Global awareness 国際意識

(池田 2016)

上智大学
SAPPHIRE UNIVERSITY

CLILの指導法

- 1 内容学習と語学学習の比重を近づける。
- 2 オーセンティック素材(新聞、雑誌、ウェブサイトなど)の使用を奨励する。
- 3 文字だけでなく、音声、数字、視覚(図版や映像)による情報を与える。
- 4 様々なレベルの思考力(暗記、理解、応用、分析、評価、創造)を活用する。
- 5 タスク(特に生活に関連するもの)を多く与える。

上智大学
SAPPHIRE UNIVERSITY

- 6 協同学習(ペアワークやグループ活動)を重視する。
- 7 異文化理解や国際問題の要素を入れる。
- 8 内容と言語の両面での足場(学習の手助け)を用意する。
- 9 4技能をバランスよく統合して使う。
- 10 学習スキルの指導を行う。

(池田 2012)

上智大学
SAPPHIRE UNIVERSITY

非CLILとCLILの指導法の違い

非CLIL的指導	CLIL的指導
教え込み (Instruction)	やり取り (Interaction)
独白的 (Monologic)	対話的 (Dialogic)
練習問題 (Exercise)	解決課題 (Task)
言語練習 (language practice)	言語使用 (language use)
技能分離 (Skills segregation)	技能統合 (Skills integration)
人工的 (Artificial)	真実的 (Authentic)
文脈なし (Out of context)	文脈あり (In context)
甘やかし (Spoon-feeding)	足場組み (Scaffolding)
反復 (Repetition)	思考 (Cognition)
低次思考力 (Lower-Order Thinking Skills)	高次思考力 (Higher-Order Thinking Skills)
言語習得 (language acquisition)	言語活用 (Language activation)

(池田 2016)

上智大学
SAPPHIRE UNIVERSITY

CLILの第二言語習得上の利点

- 1 中身のある内容により、動機づけが高まる。
- 2 意味のある豊かなインプットが与えられる。
- 3 インターアクションを行う必然性が生まれる。
- 4 聞く・読む・話す・書くを有機的に統合できる。
- 5 汎用能力として実社会での活用に転移しやすい。

上智大学
SAPPHIRE UNIVERSITY

第二言語習得研究による証拠

CLIL学習者が得意なのは

- 語彙 (vocabulary)
- 文法 (morphosyntax)
- 話し言葉の流暢さ (oral fluency)
- 書き言葉の正確さ (writing accuracy)
- 意思疎通の方略 (communication strategies)

しかし、発音 (pronunciation)、日常言語 (non-technical language)、書き言葉の結束性・談話力 (writing coherence/discourse) はそうではない。

(Dalton-Puffer, C. 2015)

2 CLILの事例:教材と授業



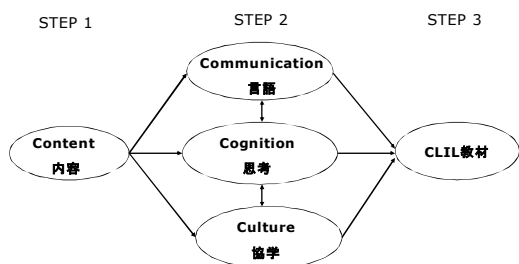
教科書か自主教材か？

	Using CLIL textbooks 教科書を使う	Making own materials 自分で教材を作る
Most of the time ほとんどそうする	23.0%	48.1%
Quite often しばしばそうする	23.1%	42.3%
Not very often あまりそうしない	21.2%	7.7%
Hardly ever or never ほぼ/まったくそうしない	32.7%	1.9%

N=52 (Austria, Finland Spain, the Netherlands)

(Morton 2013)

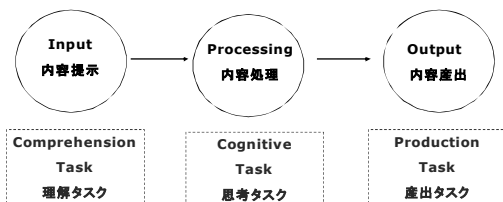
CLIL教材の作成法



Step 1: オーセンティック素材の収集

- **Texts** 書籍、新聞、雑誌、ネット、小説など
- **Visuals** 写真、イラスト、地図、チャートなど
- **Statistics** 統計データ、表、グラフなど
- **Videos** ネット映像、映画、テレビ番組など
- **Audios** 歌、講演、インタビューなど

Step 2: タスクの作成



思考タスクのタイプ

1. **Listing (案や事実の列挙)**
brainstorming, fact-finding
2. **Ordering and sorting (仕分けや順位付け)**
sequencing, ranking, classifying
3. **Comparing (比較や対照)**
finding similarities and differences
4. **Problem-solving (実生活の問題解決)**
logic puzzles, real-life problems, case studies
5. **Sharing personal experiences (体験や意見の共有)**
anecdotes, reminiscence, opinions, reactions
6. **Projects and creative tasks (プロジェクトや創造活動)**
survey, research, creative writing, skits

(Based on Willis 1996, Willis & Willis 2007)

タスク産出表

	LOTS 低次思考スキル			HOTS 高次思考スキル		
	暗記	理解	応用	分析	評価	創造
個人						
ペア						
グループ						
全体						

CLIL科学授業の分析

Content 内容	Communication 言語	Cognition 思考	Culture 協学
Declarative knowledge (教科知識)	Language knowledge (言語知識)	LOTS (低次思考力)	Cooperative learning (共同学習)
熱の伝わり方	暖房器具名 熱伝導用語 日常語と学術語	暗記 (Task 1) 理解 (Task 2)	ペアワーク グループワーク
Procedural knowledge (活用知識)	Language skills (言語技能)	HOTS (高次思考力)	Global awareness (国際意識)
暖房器具の選び方	話す (Task 1) 聞く (All tasks) 読む (Task 3) 書く (Task 4)	分析 (Task 1) 評価 (Task 3) 創造 (Task 4)	環境・資源意識

CLIL授業の技法

国	校種	英語力	科目	言語領域	指導技法
スペイン	小学校	初級	美術	話す	スピーキングフレーム
イギリス	小学校	(母語)	英国史	読む・書く	スキミング・手紙書き
オランダ	中学校	中級下	地理	語彙	(電子)フラッシュカード
日本	中学校	初級	日本史	書く・文法	プロセスライティング
ドイツ	中学校	中級下	地理	書く・文法	ライティングフレーム
オランダ	高校	中級	歴史	書く	ピアレビュー
ドイツ	高校	中級上	歴史	読む	テキスト分析
日本	大学	中級上	英語史	発音	リピーティング
日本	大学	中級上	英語史	聞く	インフォメーションギャップ

3 CLILの発展: 汎用能力育成



汎用能力(コンピテンシー)とは？

認知的能力

- ① 知識活用力
- ② 批判思考力
- ③ 課題設定力
- ④ 問題解決力
- ⑤ 革新創造力
- ⑥ 意思行動力
- ⑦ メタ学習力

教科知識を実生活や実社会で活用する力
論理的、多角的、分析的に考える力
本質を洞察し、課題を設定する力
最適な方法を考え、問題を解決する力
斬新な物、価値、方法を産出する力
適切な決断を下し、挑戦し行動する力
効果的方法で自律的、省察的に学習する力

社会的能力

- ⑧ 意思疎通力
- ⑨ 協調協働力
- ⑩ 地球市民力

共通言語を用いて円滑に意思疎通する力
他者と協力してチームで効率的に働く力
異文化を尊重し国際意識を持ち生きる力

倫理的能力

- ⑪ 個人責任力
- ⑫ 社会責任力
- ⑬ 国際責任力

道徳観や同情心を持ち自己に責任を持つ力
職業領域や地域社会に積極的に貢献する力
国際社会に関わり、奉仕し寄与する力
(池田 2015)

英語教育法と育成される能力

1. 英語科の学習内容

言語知識 言語技能
・文法 ・読む
・語彙 ・書く
・発音 ・聞く
・談話 ・話す

2. 習得される能力

指導要領内 指導要領外
・英語運用能力 ・母語運用力
・意思疎通意欲 ・論理思考力
・言語・文化意識・知識獲得力

3. 汎用的能力

認知的能力
・知識活用力
・批判思考力
・問題解決力
・革新創造力
・意思決定力
・メタ学習力

社会的能力
・意思疎通力
・協調協働力
・地球市民力

倫理的能力
・個人責任力
・社会責任力
・国際責任力

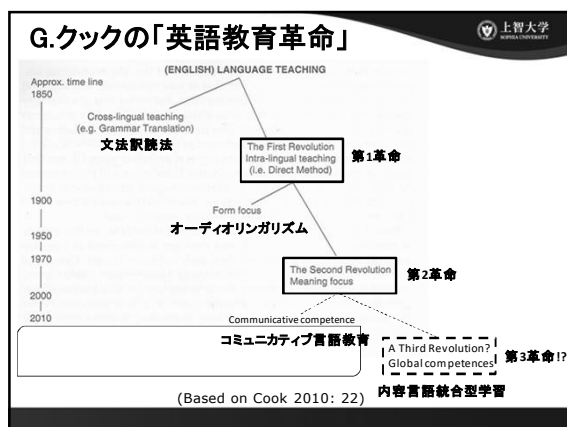
文法訳読法 (Grammar-translation Method)

音声反復法 (Audiolingualism)

意思疎通法 (Communicative Language Teaching)

(池田 2015)

内容言語統合型学習 (Content and Language Integrated Learning)



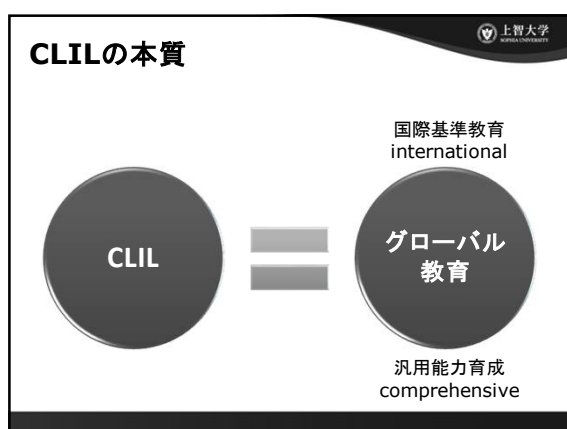
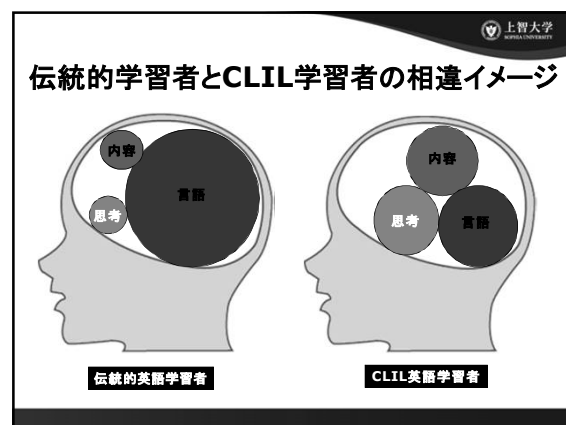
転移適切処理

Transfer-appropriate processing

Remembering what we learn is easier when we are in a situation that is similar to the one in which we learned it in the first place or when using the kinds of cognitive processes that we used during learning.

学んだことを再現しやすいのは、最初に習得した時と状況が似ているか、学習時に用いたような思考力を使う時である。

(Lightbown 2014: 57)



参考文献

- 池田真 (2017), 「英語科におけるコンテンツ、コンテキスト、コンピテンシー」、『指導と評価』、第63巻1月号、57-59頁。
- 池田真 (2016), 「CLIL活用の新概念と新ツール」, 池田真、渡部良典、和泉伸一 (編著), 『CLIL 内容言語統合型学習: 上智大学外国語教育の新たな挑戦』、第3巻 (授業と教材)、上智大学出版、1-29頁。
- 池田真 (2015), 「語学能力の育成から汎用能力の育成へ」, 奈須正裕、江間史明 (編著), 『教科の本質からコンピテンシーへ: 資質・能力を中心に据えたカリキュラム編成と授業づくりのために』、図書文化社、157-181頁。
- 池田真 (2012), 「CLILの原理と指導法」, 和泉伸一、池田真、渡部良典 (編著), 『CLIL 内容言語統合型学習: 上智大学外国語教育の新たな挑戦』、第2巻 (実践と応用)、上智大学出版、1-15頁。
- Anderson, L., Kathwohl, D., Airasian, P., Cruikshank, K., Mayer, R., Pintrich, P., Rahts, J., & Witrock, M. (Eds.) (2001). *A taxonomy for learning, teaching and assessing: A revision of Bloom's taxonomy of educational objectives*. New York: Longman.
- Ball, P., Kelly, K. & Clegg, J. (2015). *Putting CLIL into practice*. Oxford: Oxford University Press.
- Chadwick, T. (2012). *Language awareness in teaching: A tool kit for content and language teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Cook, G. (2010). *Translation in language teaching: An argument for reassessment*. Oxford: Oxford University Press.
- Coyle, D., Hood, P. & Marsh, D. (2010). *CLIL: Content and language integrated learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- García, O. & Wei, L. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Lightbown, P. (2014). *Focus on content-based language teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Linares, A., Morton, T., & Whittaker R. (2012). *The roles of language in CLIL*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyster, R. (2007). *Learning and teaching languages through content: A counterbalanced approach*. Amsterdam: John Benjamins.
- Morton, T. (2013). Critically evaluating materials for CLIL: Practitioners' practices and perspectives. In Gray, J. (Ed.), *Critical Perspectives on Language Teaching Materials*, London: Palgrave Macmillan, pp. 111–136.
- Willis, J. (1996). *A Framework for Task-based Learning*. Harlow: Longman.
- Willis, D. & Willis, J. (2007). *Doing Task-based Teaching*. Oxford: Oxford University Press.

講演 2

名古屋大学日本法教育研究センターと CLIL

宮島 良子

名古屋大学大学院法学研究科 特任講師

第10回 大阪大学 専門日本語教育研究協議会

内容言語統合型学習 (CLIL) の実践に向けて

2017年2月21日(火)

講演2 14:10 - 15:00

『名古屋大学日本法教育研究センターとCLIL』

名古屋大学大学院法学研究科
特任講師 宮島 良子
(法政国際教育協力研究センター勤務)

1

目次

1. 名古屋大学日本法教育研究センター (CJL)

- 機関紹介

- ミッションポリシー

- 修了生

2. CLIL から見た CJL の教育活動

- 内容

- 方法

2

日本法教育研究センター (CJL) とは？

・名古屋大学大学院法学研究科と法政国際教育協力研究センター (CALE) が現地大学と共同で運営

- ・ **アジア7カ国8カ所** に設置
内5カ国6カ所の CJL で **教育活動** を展開
- ・ **【アジア法研究拠点】**
現地法律家との共同研究によるアジア法情報の発信
- ・ **【法学教育支援拠点】**
各国の法整備を自律的に推進できる人材育成
日本語による日本法教育プログラムの実施

日本法教育研究センター

(Research and Education Center for Japanese Law ; CJL)
の ミッションポリシー

- ・「発展途上国ないし体制移行を経験した国である母国の法の現状・構造的問題を理解し、母国の法制度について基礎的な知識を持ちながらも、それに対して批判的な問題意識を持つことを通じて、母国に必要とされる法改革に貢献でき、かつ、日本との懸け橋となるような人材を育成し、そのための教育研究上の協力関係を発展させる。」(宮島・金村2016)

4

CJLの修了生 (2017年2月)

名古屋大学
NAGOYA UNIVERSITY

全修了者数約200名

モンゴル

修了生
41名
2006年設立
21名名古屋大学
法学部、法学部、法律事務所等に就職

ウズベキスタン
修了生
51名
2005年設立
28名名古屋大学、大法院アカデミー、日本企業等に就職

カンボジア
修了生
40名
2008年設立
7名名古屋大学、日本企業等に就職、JICA、日本企業等に就職



名古屋大学
現在在籍者
28名
修了号取得者
40名
博士号取得者
3名

ベトナム (ハノイ)

修了生
58名
2007年設立
17名名古屋大学
検察庁、実務環境、日系法律事務所等に就職

ベトナム (ホーチミン)
修了生
13名
2012年設立
1名名古屋大学
日系法律事務所、企業等に就職

ラオス
修了生
~名
2014年設立

CJLの教育プログラム発想の経緯

時間的制約
(現地法の学習
と同時並行)

日本語による
法学研究
(論文作成)

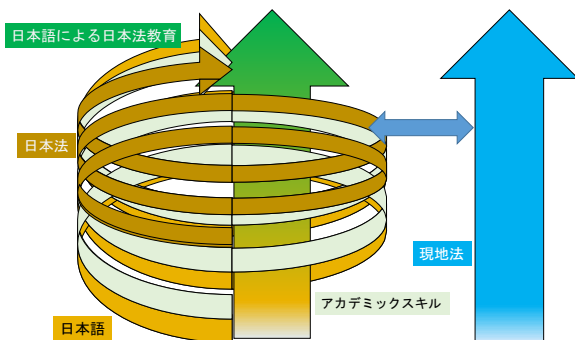
人的リソース
の制約



目的志向
デザイン思考

現場を知る⇒関係者を巻き込む⇒具体的に可視化

現在のCJLの教育プログラムのイメージ図



CJLのスタッフ

<名古屋大学大学院法学研究科より派遣>

- ・特任講師(日本語) 1名
- ・特任講師(日本法) 1名

<現地採用>

- ・常勤講師(日本語) 複数名
- ・非常勤講師(日本語・日本法) 複数名

※現地で活躍する弁護士の方々にもご協力いただいています。

《JICAからの協力》

ウズベキスタンセンターのみ、青年海外協力隊 派遣協力
(ボランティア)

会話ボランティア、文化ボランティア、法曹関係者による無償法学講義など

名古屋に海外拠点運営員会設置。

名古屋に統括を配置。

日本から1週間程度、学内外の法学教員を派遣し、集中講義(スクーリング)を実施。

CJL3年次教材「日本の法とシステム」

日本語で法学を
教える教材

CJL 4 年生日本語総合教材

「クローズアップ現代」

総合的アカデミック
スキル教材

- ・ビデオ
- ・ノートテイキング
- ・読解
- ・作文
- ・発表
- ・教える
- ・教えられる

CJL夏季セミナー 例年8月中旬～下旬 約2週間

- ・講義受講
- ・論文発表会
- ・交流
- ・訪問見学
(裁判所、刑務所等)



その他の活動 (予算次第・・・)

CJL特任講師会議

CJL現地講師研修

CJL日本語講師体験(日本語インターン)

CJL日本法講師体験(日本法インターン)

CJLにおける日本語教育の特徴

CJLの学生が目指す言語レベル

CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment))
「外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠」
B2 自立した言語使用者に近いが、異なる点は以下の通り。

自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的かつ具体的な話題の複雑なテキストの主要な内容を理解できる。お互いに緊張しないで母語話者とやり取りができるくらい**流暢**かつ**自然**である。
◎よく思考された上での受信、発信を優先し、多少たどたどしさや、不自然さが残るのはしかたがないと考える。

かなり広汎な範囲の話題について、明確で詳細なテキストを作ることができる。さまざまな選択肢について長所や短所を示しながら自己の視点を説明できる。

◎自分の専門分野を中心とした話題が扱えることを最優先とし、不得意分野があるのはしかたがないと考える。

13

項目	CLIL	CJL	
学習目的	言語学習・教科学習	法学研究	
指導者	語学教師・教科教師	日本語教員、法学教員	
使用内容	トピック・教科	文化、社会、日本史、公民、日本の法システム、社会問題、法的問題など	
評価対象	言語・内容	・日本語 (日本語能力試験型) ・日本語総合 (聞いて要約、読んで要約、意見表明) ・法学知識 ・法学記述 ・面接 (口頭試問)	

池田真ほか(2011)P4を参考に

14

CJLのCLILタイプ

- 単発の授業やいくつかの限られた科目だけではなく、学部4年間 (モンゴルは5年間) を通したカリキュラム全体がCLIL。

- 「目的」 Hard
- 「頻度・回数」 Heavy
- 「比率」 Total
- 「使用言語」 Bilingual-Monolingual(学年、科目や担当者などによって、そのグラデーションは異なる。)

- CLILは日本語教育、法学教育、法教育を行わなければならないCJLに適している。

15

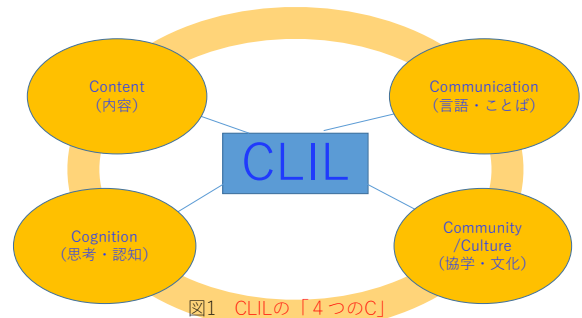


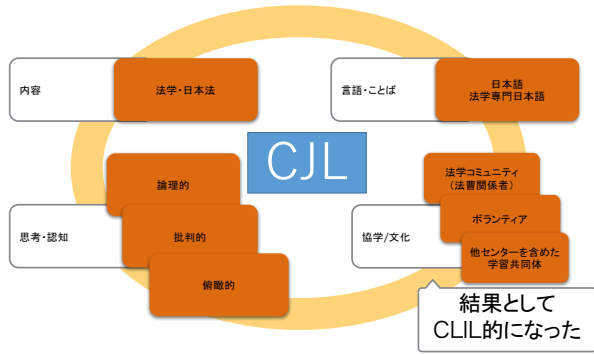
図1 CLILの「4つのC」

池田真(2011) P5

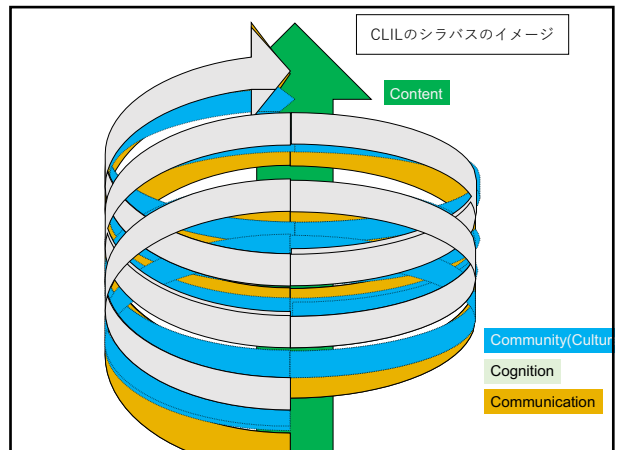
16

完成図は誰も持っていなかった…

CLILから見たCJLの教育活動



CLILのシラバスのイメージ



CJL型CLILの今後の課題

日本語学習の初期段階から
ミッションポリシーに沿った教育プログラムの再開発

CJL型CLILの確立と共有

現地化を意識した現地教員のエンパワメント

引用文献

篠田陽一郎 (2016) 「[研究ノート] 日本法教育研究センターにおける現状認識と取組み ―法教育と日本語教育とのアーティキュレーション―」【特集: 日本法教育研究センターにおける法学と日本語教育学の多元複層的なアーティキュレーション】『Nagoya University Asian Law Bulletin』 Vol.2, pp.63-74. http://cale.law.nagoya-u.ac.jp/_userdata/alb2_toku4.pdf

宮島良子・金村久美 (2016) 「内容言語統合型学習 (CLIL) で読み解く日本法教育研究センター (CJL) のプログラムデザイン ―ミッションポリシー、カリキュラムからコミュニティ形成まで―」【特集: 日本法教育研究センターにおける法学と日本語教育学の多元複層的なアーティキュレーション】『Nagoya University Asian Law Bulletin』 Vol.2, pp.2-24. http://cale.law.nagoya-u.ac.jp/_userdata/alb2_toku1.pdf

渡部良典他 (2011) 『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法』上智大学出版

26

報告

大阪大学における CLIL の実践に向けて

西口 光一

大阪大学国際教育交流センター

日本語教育研究チーム 教授

2017年2月21日(火)
第10回大阪大学専門日本語教育研究協議会
内容言語統合型学習(CLIL)の実践に向けて
報告

大阪大学の日本語教育におけるCLILの実践 に向けて

西 口 光 一
大阪大学 国際教育交流センター
koichi@ciee.osaka-u.ac.jp

目 次

I. CLILへの注目の背景 – 本研究協議会の「背景および趣旨」から

- (1) 大学での日本語教育の構成の変化
- (2) 学習者の日本語力や習得潜在力の多様性

II. 日本語の学習と教育の方法の文脈

- (1) 表現活動への注目
- (2) グローバルな学生交流時代の日本の大学教育の一環としての日本語教育の追求
- (3) 熱中 (engagement) と ZPSLD
- (4) 内容と言語の統合

III. 大学の中での日本語教育者の地位の確立

- (1) 一教養人としての大学日本語教員
- (2) 地球的・人類的視点を有する教養人としての大学日本語教員
- (3) (提供する) 教育においても国際学生交流を率先する大学日本語教員

IV. おわりに

教員自身が自身を「開発」しながら、グローバルな学生交流時代の日本の大学として「何を提供することができるか」(what and how we can contribute)を²

I. CLILへの注目の背景 – 本研究協議会の「背景および趣旨」から

- (1) 大学での日本語教育の構成の変化
 - a. 日本語研修コース – 3クラス、定員30名
(現在は日本語集中コースに名称変更)
 - b. 国際交流科目 日本語 – 6レベル、計13クラス(各週3コマ)
想定195名(短期留学生と学部英語コース学生)
※ 学生集団としては後者が約80%となっている。
※ 受講者は2008年春の31名から、2016年秋205名
(短期留が161名、英語プログラムが44名)
 - c. その他①
日本語選択コース (JBが8コマで想定60名、その他の選択が9コマで想定145名)
※ 漢字クラス3コマを除く
日韓プログラム (秋のみ、毎年5-8名)
※ 日韓共同理工系学部留学生予備教育
 - d. その他②: 学期外の超短期日本語プログラム
J-ShIPサマー (夏の8週間) – 4クラス、定員60名 (2017年夏の予定)
J-ShIPウィンター (冬の5週間) – 2クラス、定員30名
夏SS (夏の3週間) – 1クラス、定員15名
冬SS (冬の3週間) – 1クラス、定員15名

3

I. CLILへの注目の背景 – 本研究協議会の「背景および趣旨」から

- (2) 学習者の日本語力や習得潜在力の多様性

「これまでも、日本語教育を受ける学生には漢字系と非漢字系との違いや一般的な既習日本語力の違いなどがありました。現在は、くだけた口頭日本語コミュニケーションは十分にできるがややフォーマルなゼミでの話し方ができない学生や、話す能力はひじょうに高いが読み書きがまったくできない海外から帰国してきた日本人学生や日本で生まれ育った外国籍者など、これまでに見られなかった学習者の質的な多様性が出てきています。」

4

I. CLILへの注目の背景 – 本研究協議会の「背景および趣旨」から

- (3) 学生の「自律学習」能力の向上

「学生たちの情報通信メディアを使つての情報収集やその加工の能力や情報コミュニケーションの能力はますます向上しています。」

5

II. 日本語の学習と教育の方法の文脈

- (1) 表現活動への注目

- a. 1998年4月から 自己表現中心の入門日本語教育
- b. 2010年4月から 自己表現活動中心の基礎日本語教育
※ 「構造か実用的なコミュニケーションか」という二項対立の克服
⇒ 社会的なコミュニケーションと基礎日本語力の養成 (西口, 2013; 2015)
- c. 2014年4月から 表現活動主導の中級日本語教育
※ 自己表現活動力の拡充とテーマ(人と社会)に基づく内容表現力の基礎の養成 (西口, 2014)

6

II. 日本語の学習と教育の方法の文脈

(2) グローバルな学生交流時代の日本の大学教育の一環としての日本語教育の追求

日本学術会議(2010)

(3) 日本語教育 ① 公共的言語の再生(論理的で普遍的な言葉の必要性)

言語は決して表層的なコミュニケーション手段ではなく、**認識・思考・感情の「内面の媒体」**である。その「内面の媒体」である言語を(自然的に獲得した母語を土台としつつも)**論理的で普遍的な「公共的言語」(書き言葉/話し言葉)**へと育てることが、公教育の「言語教育」の目標でなければならない。

<中略>

言語は3つの相を持ち、その三者が動的な「循環的スペクトラム」を構成している。すなわち、私的空間(=相互了解圏)内において通用する「私的話し言葉」、**他者が存在する公共的な空間を前提とし、そこでの相互的理解と交流のために使用される「書き言葉」、更に公共的な場での直接的な意見の交換を可能にする「公共的話し言葉」**である。この三者は循環して、言語の力を活性化する。

7

II. 日本語の学習と教育の方法の文脈

(3) 熱中(engagement)とZPSLD

- ① 表現活動に従事することが学習者の熱中を誘う。
- ② 内容(テーマ)の探究が学習者の熱中を誘う。
- ③ 内容(テーマ)について各自の潜在力に基づいて探究できるようにするのが学習者の多様性を包摂できる。
- ④ 内容と言語についてそのような探究活動のZPSLD(zone of proximal second language development、第二言語発達最近節領域、西口、2015)を巧みに企画し、授業として構成できるのは、教養と日本語教育の経験のある教師である。
- ⑤ 日本語教育者では、多くの場合に、母語話者あるいはそれ相当という有利さがある。

8

II. 日本語の学習と教育の方法の文脈

(4) 内容と言語の統合

- ① 学生の「意味のある内容」への希求
- ② 内容の学習と言語の学習の相互促進
※ (1)の実践で痛感
- ③ 「両得」の価値

9

III. 大学の中での日本語教育者の地位の確立

- (1) 一教養人としての大学日本語教員
- (2) 地球的・人類的視点を有する教養人としての大学日本語教員
- (3) (提供する)教育においても国際学生交流を率先する大学日本語教員

10

IV. おわりに

CLIL(仮称)の実現に向けて、教育企画・開発的な課題、教育実施上の課題、制度整備的な課題などさまざまな課題があるが、わたしたち**教員自身が自身を「開発」しながら**、グローバルな学生交流時代の日本の大学として「何を提供することができるか」(what and how we can contribute)をしっかりと考えたい。

11

□ 教科書等

大阪大学留学生センター(1998)『A Reference Manual for Learners of Japanese』学内教材
西口光一(2012-2014)『A New Approach to Elementary Japanese ーテーマで学ぶ基礎日本語』vol.1 & vol.2(英語版、中国語版<簡体字版と繁体字版>、ベトナム語版、タイ語版)くろしお出版

大阪大学国際教育交流センター(2016)『A New Approach to Intermediate Japanese』学内教材

□ 参考文献 (出版年順)

- 日本学術会議(2010)「日本の展望ー学術からの提言2010 報告 言語・文学分野の展望ー人間の営みと言語・文学研究の役割」日本学術会議、言語・文学委員会 ※Webで入手可能
大阪大学国際教育交流センター(2013)『留学生大量受け入れ時代に向けた大学における新たな日本語教育スタンダードの構築』平成21年度～平成24年度科学研究費助成金基盤研究(B)課題番号21320093研究成果報告書
西口光一(2013)『第二言語教育におけるバフチンの視点』くろしお出版
西口光一(2014)『総合中級日本語のカリキュラム・教材開発のスキーム』『多文化社会と留学生交流』第18号pp.77-85 ※OUKAで入手可能
西口光一(2015)『対話原理と第二言語の習得と教育』くろしお出版
西口光一(2016)『基礎日本語教育における言葉と自己』『未来を創ることばの教育をめざしてー内容重視の批判的言語教育の理論と実践』佐藤慎司他編(2016)ココ出版
西口光一(2017出版予定)「表現活動と表現活動主導の第二言語教育」『多文化社会と留学生交流』第21号pp.37-45
西口光一(2017)「コミュニカティブ・アプローチの超克ー基礎日本語教育のカリキュラムと教材開発の指針を求めて」Web版『リテラシー』20, pp.12-23.
西口光一編(2017出版準備中)『表現活動主導の日本語教育』(仮題)

全体討論

大学での日本語教育における CLIL の可能性を考える

全体討論（16：10～16：55）：大学での日本語教育における CLIL の可能性を考える
司会 国際教育交流センター 准教授 西村 謙一

【各報告者からの補足説明】

（池田）

CLILは依然、ニッチ産業で成長産業である。

日本語教育の中で CLIL が広がっていけば、世界の言語教育において稀有な事例となる。

→日本語教育での CLIL は以下の点において成功可能性のある分野といえる。

①教員：言語やそのほかの分野で大学院での高度な教育を受けている人が教員となっている。

②生徒：英語学習者は英語が好きでやっている人は少ないが、日本語学習者は必要性や興味関心のもとに学習している人が多い。

③内容：日本という共通の関心/コンテキストを持っている。

☞CLIL を実践しようとしている人たちへのアドバイス→教員自身が楽しむことが重要。

（池田先生から宮島先生に質問）

授業の中で学生に思考を深めるコミュニケーションタスク（自国と日本との比較等）はないか。

⇒宮島：公民等の授業で自国の状況や自国と日本の比較（プレゼンテーション、ライティング）に取り組んでもらっている。

（宮島）

到達目標を教員間で共有している

→どういう風な目標を示すと日本語以外の教員も共有できるのかを検討したもの

☞CLIL という概念で整理したことにより、法学教員はじめとしてセンター内外の教員・スタッフにセンターの日本語教育がどのようなものであり、特殊性がどこにあるのかなどが説明可能となった。

（宮島先生から池田先生に質問）

英語教育の現場での状況はどうか？

→池田：英語教育でも状況は似ていて、語学能力検定に対応した授業を任せられるよりも、自分の関心等に近いことを教えることができる CLIL での授業の方が、より強く教育しているという実感を得られやすい。

（西口）

自分の専門分野を講義するようになって、学生とのインタラクションをとりいれているが、学生がとても優秀である。そういった優秀な学生が興味を持てて、かつ、日本語力の伸長にも繋がるような授業をやっていきたい。

（西口先生から宮島先生に質問）

6カ国共通カリキュラムなのか？

→宮島：緩やかな共通性を持ったカリキュラムである。国によって、単位が国でも認定されたりするところもあれば、修了証だけだったりバラバラである。また、国によって言語体系が異なるため、同じアプローチで教えていくのには限界がある。

【フロアからの質問】

質問者1：CLIL の場合の評価基準はあるのか？

→池田：評価ツールとして内容を問う穴埋めなどのテストも実施する

強系の CLIL：科目の先生→筆記テスト

弱系の CLIL：語学の先生→従来の語学テスト＋パフォーマンステスト（書かれている内容も評価対象）

☞cognition（思考力）を評価することが、CLIL では重要であるのだが、評価に主観が強く反映されてしまうため、難しい。

→宮島：統一の評価基準はなく、各担当者によって異なる。
但し、ライティングの評価などは日本語教員はプロセスを評価する傾向、専門科目の教員は結果を評価する傾向があるようだ。

質問者 2：ばらばらの関心、専攻の学生が集まる授業でテーマ設定をどのようにするか。

→池田：日本語の授業に関しては、少なくとも日本に興味があると思われるので、日本を切り口にすることが可能。

学生のニーズを直接聞く。

教員が関心のあるものを扱って、学生に興味を持ってもらうように授業運営をする。

学生の世代や興味などとかけ離れないテーマであることが重要。

→西口：自分が面白いと思うものを扱い、色々な種類の授業を提供することで、学生に選んでもらえるようにするのが、いいのではないかと考えている。

質問者 3：教育現場でどのように協力・連携していくのか

→宮島：日本語、専門科目のそれぞれに分業してしまうとうまくいかないため、積極的に意見交換をしていく必要がある。

その際、お互いに相手の領域に踏み込むことになるため、対立が生じやすい。

日本語教員は対立を回避しがちだが、それを恐れずによりよい教育と学生の成長のためにお互いの領域を知ろうとする必要がある。

→池田：一番やりやすいのは 0 からプログラムを作ること。

語学の先生だけではなく、専門科目の先生にも参加してもらう。

教員求人の段階で CLIL 実施を記載し、対応できる教員を増やし、学部内で多数派を形成することも策のひとつ。

質問者 4-1：新たに教材開発するときの注意点

→池田：各教員が教材を作る際には、CLIL の原理をしっかり抑えることが重要。

日本 CLIL 教育学会を今春立ち上げ予定で、その学会でもワークショップ等研修を行っていく予定。

→宮島：専門科目の教員と日本語の教員が教材を協力して作っていく過程で、専門性と日本語力のバランスをとった教材を作ってきた。

質問者 4-2：公正な判断能力を養うにはどうしたらよいか。

→宮島：模擬裁判の実施によって、公正な判断能力や合意形成といった考えかたの醸成と日本語能力の向上の双方を目指している。

カンボジアでは、実施した模擬裁判を現地語に翻訳し、一般の学生たち（センターに所属していない現地大学の法学部の学生たち）にも見てもらう取り組みをしている。

→西口：テキストに「公正さとは何か」といったような UNIT を作ることで扱いやすくなるのではないか。

質問者 5：CLIL は全てのアプローチをコミュニケーション的なアプローチである。様々なアプローチを学んできた教員が CLIL にたどり着くため、多くを包括していると言える。

その前提は学生にベーシックな能力があることであるが、そこまでの能力に到達するには、これまでのメソッドで取り組んでいく必要がある。たとえば、アカデミックライティングはとにかく書いて添削して、を繰り返すしかないが、書いてもらう内容を練ることで CLIL 的な要素を入れることができる。

→西口：アカデミックライティングやプレゼンテーション等の科目と CLIL で扱うことのできる授業はニーズが違うので双方の授業を共存させていきたい。

協議会風景

「第10回大阪大学専門日本語教育研究協議会」講演風景



池田 真 先生 (1)



池田 真 先生 (2)



宮島 良子 先生 (1)



宮島 良子 先生 (2)



西口 光一 教授



全体討論のパネリストと司会



会場の様子



質疑応答の様子 (1)



質疑応答の様子 (2)

付録：過去の大阪大学専門日本語教育研究協議会の開催状況

1. 第1回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「大学院レベルの専門日本語教育とは何か」
日時：2007年3月13日（火）13：00～17：50
場所：吹田キャンパス IC ホール 留学生センター2階 Room 5 & 6
2. 第2回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「大阪大学における専門日本語教育のさらなる定着に向けて
ー留学生・指導教員とのディスカッションを通してー」
日時：2009年3月10日（火）13：00～17：30
場所：吹田キャンパス IC ホール 留学生センター2階 Room 5 & 6
3. 第3回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「専門日本語教育におけるライティング能力の養成
ー留学生と日本人学生の双方に対する教育の共通課題ー」
日時：2010年3月9日（火）13：00～17：30
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター会議室1
4. 第4回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「キャリア形成につながる専門日本語教育を考える」
日時：2011年3月8日（火）13：00～17：00
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター会議室1
5. 第5回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「日本語教育のスタンダードの課題と展望」
日時：2012年2月15日（水）13：00～17：00
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター会議室1
6. 第6回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「研究留学生のための専門日本語教育を考える」
日時：2013年2月19日（火）13：00～17：00
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター会議室1
7. 第7回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「上級レベルの専門日本語教育 ー理論と実践ー」
日時：2014年2月17日（月）13:00～17:00
場所：吹田キャンパス IC ホール Room 5 & 6
8. 第8回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「グローバル時代を生き抜く力の養成と大学における日本語教育を考える ー大学から社会への橋渡しを視野にー」
日時：2015年2月17日（火）13:00～17:00
場所：吹田キャンパス コンベンションセンター2階 会議室2

9. 第9回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「専門日本語教育における IT 活用の可能性」
日時：2016 年 2 月 16 日（火）13:00～16:55
場所：吹田キャンパス IC ホール Room 5 & 6
10. 第10回大阪大学専門日本語教育研究協議会：
「内容言語統合型学習（CLIL）の実践に向けて」
日時：2017 年 2 月 21 日（火）13:00～17:00
場所：吹田キャンパス IC ホール Room 5 & 6